



Title	中国語の語気助詞 “呢（NE）”
Author(s)	周，艶紅
Citation	大阪大学，2009，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54324
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	周 肖 ^{ショウ}	艶 恩 ^{エン}	紅 冪 ^{コフ}
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）		
学 位 記 番 号	第 2 3 2 9 5 号		
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 6 月 30 日		
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻		
学 位 論 文 名	中国語の語気助詞“呢(NE)”		
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 深澤 一幸 (副査) 教 授 春木 仁孝 准教授 大谷 晋也		

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は中国語の語気助詞“呢（NE）”について、各先行研究を踏まえ、仮説を立て、考察を行ったものである。

第一章では、先ず問題提起を行った。中国語教育の難点の一つである“呢（NE）”はなぜ疑問文にも平叙文にも使われるのか；統一的に解釈する可能性があるのか；統一的な解釈が可能だとすれば、それはどのようなものか；疑問文に使われる“呢（NE）”と“吗（MA）”が対立しながら相補している理由はなんなのか。

第二章では主な先行研究から、“呢（NE）”をNE1とNE2の二つに分ける立場と統一的に捉える立場とを批判的かつ継承的に紹介した

第三章では、“呢（NE）”を意味ではなく、用法に基づき、用法Ⅰ.疑問文、用法Ⅱ.平叙文－強調、用法Ⅲ.平叙文－持続、そして用法Ⅳ.文中、の四つに整理した。用法Ⅳ.文中は省略疑問文との繋がりを容易に見て取ることができ、一種の自問自答文と見なし得ることから、用法Ⅰ.疑問文から拡張されたものであるということを示した。また、用法Ⅰ.疑問文の中のC.反語文は、意味上、用法Ⅱ.平叙文－強調と共通することから、用法Ⅰ.疑問文と用法Ⅱ.平叙文－強調は用法ⅠのC.反語文を介して繋がっていることを明らかにした。用法Ⅰ.疑問文と用法Ⅱ.平叙文－強調の繋がりは疑問文の用法と平叙文の用法との繋がりととも言える。そして、用法Ⅱ.平叙文－強調と用法Ⅲ.平叙文－持続は「静止画」と「動画ビデオ」という関係でもあり、因果連鎖でもあるため、互いに繋がっているということを示した。まとめとして、四つの用法は、用法Ⅳ.文中←用法Ⅰ.疑問文⇄用法Ⅱ.平叙文－強調⇄用法Ⅲ.平叙文－持続というように互いに繋がっており、共時的には連続性が見られると主張した。

第四章では通時的な観点から“呢（NE）”の歴史的な由来を考察した。疑問文につくNE1は“爾→嚮、你、尼→呢”という変化、平叙文につくNE2は“里/裏→哩→呢”という変化をそれぞれ経てきたことを考察し、“呢（NE）”に統一されるまでの変化を明らかにした。また、その間、語気助詞“那”が、別の源を持つものの、“呢”への統合に重要な役割を果たしたことも明らかにした。そして、表面的には“呢（NE）”一字への統一が起こったのであるが、実は、それは内面的にカテゴリー化が行われたことの表れに過ぎないとの主張をおこなった。具体的には以下の通りである。この二つの“呢（NE）”の統合は単に文字や音声が統一されたというだけではなく、人間の認知によるカテゴリー化が行われた結果であると考えられる。言い換えれば上位カテゴリーとしての意味、つまり本質的な意味が一つとして認識されるようになったため、疑問文と平叙文の用法がまとめられ、一つの“呢（NE）”への統一が可能となり、また他の語気助詞と区別がなされるようになったのである。

第五章では、これまでに見た、共時的に用法間に連続性が見られることと通時的な認知カテゴリー化により“

呢”に統一されたという事実を踏まえ、“呢”は語気助詞の一種であることから、話し手の主観的な気持ち、心的態度を表すものであり、以下のように仮説Ⅰを立てた。仮説Ⅰ：“呢（NE）”は「確認を要求する」という聞き手に対する話者の気持ちを表す。疑問文の中に出現する場合、疑問詞、イントネーションなどの疑問形式と協働し、聞き手や自分に対して「未確定な情報を確認する」ことを要請する。平叙文に出現する場合、前提として話者の中にある知識（確定情報）を相手に伝えて、再確認を要求する。疑問文の未確定情報に対する確認要求と平叙文の確定情報に対する再確認要求は、上位カテゴリーとしての意味が一つであるため、疑問文と平叙文の用法が一つにまとまることができ、それに対応して言語表現が“呢（NE）”一つに統一されたと言える。仮説Ⅰに基づき、用法Ⅰから用法Ⅳまでの検証を行い、仮説Ⅰの有効性を説明した。

第六章では語用論的な立場を紹介した。“呢（NE）”の語用論的な機能については、以下の仮説のように考えられる。仮説Ⅱ：“呢（NE）”は発話(顕示的伝達)とコンテキストとの関連性を顕在化させる（より顕示的にする）言語形式であり、また、“呢（NE）”は「新たな暗意が付与されることがある」という発話解釈の手続きへの指針でもある。“呢（NE）”の用いられた文は何らかのコンテキストなしに単独で使われることがなく、必ず、上下の文脈と絡み合っていることから、当該命題そのものに対する操作だけではなく、当該情報と他の知識情報との関係に関する評価をも伝えると考えられる。よって、以下のように仮説Ⅰと仮説Ⅱを統合し、結論とした。結論：“呢（NE）”は「当該情報を確認せよ」という話者の聞き手に対する語気である。また、確認した結果、つまり語用論的な機能としては「関与的な知識情報を付け加えた後、適当な推論を行え」という指示の語気である。例文を挙げて結論の有効性を説明した。

第七章では、疑問文において対立しながら相補している“呢（NE）”と“吗（MA）”を考察した。まず、“呢（NE）”と“吗（MA）”との異同を明らかにした。そして、使い分けられている根本的な原因は“吗（MA）”が“呢（NE）”とは異なり、「疑問」を表すマーカーである点にあると指摘した。また、“呢吗（NE MA）”の連用を分析した。そして、“麼呢（MONE）”という連用が方言として存在していることを指摘し、その合理性を明らかにした。

第八章では、モダリティ論から日中の対照を試みた。日本語の終助詞の「か」、「よ」、「ね」を中心に引き上げ、“呢（NE）”との異同を明らかにした。この異同は“呢（NE）”の本質的な意味と関わりがあるだけではなく、言語の類型的な違いにも関わっているようである。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、現代中国語において使用頻度が高くなり、疑問文では「疑問」をあらわし、平叙文では「強調・誇張」か「持続」をあらわすとされる語気助詞「呢（NE）」について、共時的分析にもとづき、通時的な分析をも視野にいれつつ、その本質的な意味を明らかにしたものである。「呢」は語気助詞なので、おもに話し手の態度をあらわす一種のモダリティ的存在であるという基本点から出発し、各先行研究を踏まえて、統一的な解釈を探った結果、「『呢』は「当該情報を確認せよ」という聞き手に対する話者の語気である。確認した結果、つまり語用論的な機能として「関与的な知識情報を付け加えた後、適当な推論を行え」という指示の語気も含んでいる。」という妥当な結論を導き出している。

さて、本論文でまず長所とすべきは、「呢」というこの語気助詞に関する先行研究をじつに丹念に収集し読み込んだうえで、各研究の不足を的確に批判し、自分なりの解答を出そうと勉めていることである。その検討のなかで、「呢」の通時性、つまり歴史的素性についてかなり詳しく言及していることも、注目すべきである。

さらに、著者は、認知言語学の理論、とくにカテゴリー論をしっかりと自分のものにしたうえで、「疑問」「強調」「持続」などの多義性をもつとされてきた語気助詞「呢」を、認知言語学理論の枠組みでとらえなおし、ひとつのカテゴリーに入れた。多義が「呢」という一語であらわされているからには、カテゴリー化して統一したものを找出そうとする研究の方向は、正しいといえるだろう。その意味で、「この二つの『呢』の統合は単に文字や音声が統一されたというだけではなく、人間の認知によるカテゴリー化が行われた結果であると考えられる。言い換えれば上位カテゴリーとしての意味、つまり本質的な意味が一つあるため、疑問文と平叙文の用法がまとめられ、一つの『呢』に統一できた」という著者の主張は、きわめて説得力をもつといえよう。

また、著者は中国語の「呢」を検討するにあたって、日本語の語気助詞や、中国語での類似した働きをもつ語

気助詞「嗎」と比較していることも、本論文の結論を補強するうえで、有意義である。

しかし、いくつかの不足もある。たとえば、先行研究で使用する論理的言語を日常的言語と混同する、類型論の理解が不十分、著者独自の「準助動詞」という概念が妥当でない、など。しかし、これらは、本論文の価値をそこなうものではない。

以上により、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分に価値あるものと認める。